

JSTA 日本熱帯農業学会

熱帯農業研究

Vol. 2, Extra issue 2

日本熱帯農業学会第106回講演会

I. 研究発表要旨

II. シンポジウム要旨



2009年10月17日・18日

会場 三重大学生物資源学部

October 17, 18 2009

南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究
—バングラデシュのノカリ県ハティア島とボリシャル県中部での事例—

*安藤和雄(京大東南ア研)、矢嶋吉司(京大東南ア研)、南出和余(京大地域研)

Study on "Social Software" for Development and Environment Preservation in Peripheral South Asia:
Trying to Find a Clue through Stakeholder Participation: Case Studies in Hatiya Island, Noakhali
District and Central Region, Barisal District, Bangladesh—

*Kazuo Ando (CSEAS, KU), Kichiji Yajima (CSEAS, KU), Kazuyo Minamide (CIAS, KU)

キーワード: NGO、バングラデシュ、環境問題、農村開発、PLA

Key Word: NGO, Bangladesh, Environmental Problem, Rural Development, PLA

1. はじめに

熱帯農業学会第105回講演会で発表したように、文部科学省委託研究プロジェクト「南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究」(代表 安藤和雄、2007年4月～2009年3月)を実施している。本事業は、バングラデシュとネパールにおける開発と環境保全への対応策を、当事者の視点、特に草の根レベルで問題解決に取り組んでいるNGOスタッフのプロジェクト実践経験にもとづき、PLA

(Participatory Learning and Action: 参加型相互学習実践調査法)の調査方法とその結果をKJ法によりワークショップで総合化し、Action Planを最終的に作成する試みである。社会的ソフトウェア構築のため、この過程をドキュメンテーションしている。後述するように、バングラデシュでは、自然環境と環境問題の特徴で選んだ5ヶ所が調査地として設定されている。焼畑農業が盛んなチッタゴン丘陵を除く4ヶ所では調査等が終了している。本報告では、第2、3回の調査地での取り組みを紹介したい。

2. 調査地域及び方法

1) 調査地域: 5つの調査地は、①ジヨムナ川流域変動の影響をうける中州地域(以下、担当NGO名、Samaj Kallyan Sangstha: SKS)、②地盤侵食の深刻なノアカリ県ハティア島(Dwip Unnayan Sangstha < Association of Island Development >: DUS)、③大規模な湿地帯(Peoples Oriented Program Implementation: POPI)、④焼畑農業による土地劣化地域(Tengama Mohila Sabuj Sangha: TMSS)、⑤サイクロンと洪水に頻繁に見舞われ貧困問題も深刻なボリシャル県(Community Health Care Project: CHCP, Basic Development Partners: BDP, Barisal Samaj Unnayan Sangstha: BSUSの共同)の地域である。本報告では、第2回の②ハティア島と、第3回の⑤ボリシャル県の調査地をとりあげる。

2) 調査方法: 各調査には、各NGOから1名ないし2名のNGOスタッフが参加した。PLAを採用し、調査結果はKJ法をもちいたワークショップにより分析・総合化された。2009年2月15日から2月20日にハティア島のDUS、2009年7月4日から7月9日にボリシャル県のCHCPのトレーニングセンターを拠点に、第2回には13のNGOから16名と安藤、矢嶋そしてオブザーバーとして宮本真二さん(琵琶湖博物館)が、第3回には12のNGOから18名と安藤と矢嶋が参加した。

3. 結果と考察

1) 調査地と対象NGOの概要: <ハティア島DUS>ハティア島は、ダッカ南東のメグナ(Megna)川の河口に位置する。1968年から河岸侵食が著しくなり、160平方キロメートル(5行政村約35,000世帯)の島の土地が流失し、堆積作用により新たに南部に土地が出現した結果、島全体が50km以上南に移動ようになった。度重なるサイクロンによる暴風と高潮の被害を受け、1970年、1990年には多数の死者が出た。DUSは、1970年のサイクロンと独立の戦禍に苦しむ人々の人道的な救済のため、1972年に活動を開始した。1975年に、サイクロン・自然災害被災者、河川浸食被害家族のリリーフ事業を開始し、現在、ハティアを中心に海岸部の4県13郡で活動している。<ボリシャル県CHCP>ボリシャル県が位置するバングラデシュ南西部のベンガル湾に近い地帯は、サイクロンが常襲し、「モリバンドデルタ」としても知られている。モリバンド(瀕死の)デルタとは、古い時代にできた地形である。それに対してノアカリ地方は、現在でも盛んに地形形成が起きているので、「アクティブ(活動的な)デルタ」と呼ばれている。ハティア島はアクティブデルタに立地している。ボリシャルの調査地の地形は、典型的ではないが、モリバンドデルタ的であると言える。CHCPが活動している2007年のサイクロン・シンドールの被災地域が調査地として選ばれた。CHCPの始まりは、1974年“Christian Health Care Project”であった。現在は、小規模金融(マイクロ・クレジット)が中心となりつつある。

2) 調査とワークショップに関する4つのSession: Session 1では、挨拶と、前回の調査の結果のレビューと

問題点などの反省、それぞれの回の調査の目的が議論され、Session2では主催NGOの活動報告がなされ、NGOスタッフとの質疑応答が行われた。Session3では、PLAにより2~3つのグループに分かれて村落住民に対する聞き取りと観察調査を行った。Session4では、各自が自分の見聞に1、2、3と優先順位づけ、各順位項目について、1枚のカードの表にキーワードを、裏にその理由を記した。その後、一人一人が前に立ち、優先順位第1位の印象をもった事実について自分のキーワードとその理由を述べた。一人一人の発表の都度に全員が質疑応答を繰り返しながら誤解を修正していく作業を行い、DU、CHCPのプログラムをもとにつくったカテゴリーにキーワードを当てはめていった。第2、第3の順位の印象の発表と議論を終え、順位にもとづくランキング表が完成した(Table1、Table2)。優先順位ごとに特徴を見出しCoping Mechanismの解明を試みた。キーワードを挙げある際には、上記のカテゴリーを気にせず思うままに書いてもらった。全てのキーワードが出そろった時点で、カテゴリー毎に分類した。したがって、同一人物の優先順位1位と2位がいずれも同一カテゴリーに属することもある。Session1、2を1日で、Session3には2日、Session4には1日をそれぞれ使った。

3) 優先順位別の事実の発見と課題：

Table 1 Priority Vote Tabulation at Hatiya Island

Program	Priorities(Person)				Remarks
	1 st	2 nd	3 rd	Total	
1.Livelihood	6	11	3	20	As DUS has no clear division of their program we further divided 'Livelihood' program and get more clusters. In 1 st priority: pure livelihood-3, agriculture-2, disaster management -1. Vis-à-vis 2 nd priority pure livelihood-1, disaster management -1, agri-5, credit -3 And 3 rd priority: pure livelihood -1, credit -1 & capacity building -1
2.Disaster Management	6	2	6	14	
3. Land Rights and settlement	4	1	4	9	
4. Health	2	2	5	9	
5. Education		1		1	
6. Advocacy		1		1	

<ハティヤ島DUS>Table1から理解されるように災害管理、浸食で土地を失った者が新しく堆積してできた土地取得のための土地所有問題、農業に対する優先度が比較的高い一方、漁民や農民の不安定で悲惨な生活状態にもかかわらず、教育や金融、収入向上関連の優先順位は低かった。保健衛生プログラムの指摘が多いのは、漁民集落の出生率の高さや悪住環境が理由である。DUS職員との意見交換では、新しく出現した土地への移住農民に対する不在地主の暴力的な対応、金貸による漁民の束縛や海賊の横行などが、社会的立場の弱い住民たちの、生活改善や発展への意欲を弱めている状況が述べられた。

<ボリシャル県CHCP>Table2の中で、Environment (環境)、Agriculture (農業)、Capacity Building (能力向上) は、現在のCHCP

Table 2 Priority Vote Tabulation at Barisal

Program	Priorities(Person)			
	1 st	2 nd	3 rd	Total
1. Environment program	4	3	6	13
2. Savings and Credit program	2	1	5	8
3. Agriculture program	5	1	3	9
4. Education program	2	5	0	7
5. Water and Sanitation program	1	0	1	2
6. Health program	1	0	0	1
7. Capacity building program	1	5	1	7
8. Adolescent Development program	0	1	0	1

が実施しているプログラムには入っていなかったが、発表の際に、新しく設置された。この地域では、サイクロンによる冠水と洪水という環境問題を、いかに村人の工夫で乗り越えているかに参加者の注目が集まった。総合点では環境の得点がかつとも高くなっている。また、優先順位別にみると、第1位では農業であり、第2位では教育と能力向上が、第3位では環境と小規模金融が、それぞれ高い得点を得ていた。調査を行った2つの村で、皆が感動を覚えた事実は、カンディ (Kandi) と呼ばれる技術である。もともとは中低地の稲田であったが、稲よりも果樹や野菜の収益が高いことと、洪水で稲田が毎年のように被害を受けるので、土を、目測で高さ約1m、幅約1.2~1.5mに盛り上げ、溝の幅約2mとなるようにした土塁であるカンディをつくる。土塁と溝の上に棚状にネットを張って、現在は、蔓性のキュウ

リや、ニガウリを栽培している。サイクロンの時、家屋がすっかりしていないモスリムの人びとが、隣人のヒンズーの人の頑丈な家屋に非難していたという話も聞いた。ここでは、「宗教の違いを越えて、環境被害の前に隣人は助け合う」という社会文化があるようだ。